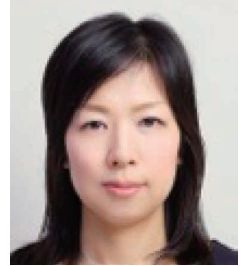


ノルウェーにおける アラブ人庇護申請女性らの戦略



上智大学 総合グローバル学部 准教授 辻上 奈美江

はじめに

国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）によると、2018年12月時点で難民登録されたシリア人は約566万人、難民未登録者や「移民」としてシリアを逃れた人を合わせると725万人程度になるとされている⁽¹⁾。彼ら・彼女らの99パーセント以上は、トルコ、レバノン、ヨルダンなど近隣の国に居住・滞在しており、その他の国に滞在しているのは0.6パーセントにすぎない⁽²⁾。だが、この0.6パーセントこそが2015年8月に命がけでヨーロッパまで移動して注目を浴びた人びとである⁽³⁾。世界中で注目された大規模な人びとの移動が、シリア危機に伴って生まれた難民の1パーセントにも満たないという事実は、難民についてどれだけのことが部外者に可視化されていないかを示唆しているように思われる。

だが、難民問題がセンセーショナルであればあるほど、「難民」という一括りの、「われわれ」には関係のない「他者」として捉えられる問題とも隣り合わせなのではないだろうか。また、「他者」であるからこそ、注目を浴びなくなると途端に過ぎ去ったこととして忘却される問題をも内包しているように思われる。本稿では、2015年にトルコ、ギリシャなどを経由し、ノルウェーに庇護申請したアラブ人女性への聞き取り調査から、彼女らのノルウェーまでの道のり、難民受け入れセンターでの生活の一片を明らかにする。

なお本稿は、2016年2月にトロムソ、2016年8月にオスロおよびフルダールの難民受け入れセンター、2017年8月にオスロ、フルダール、モス、そして2019年2月～3月にオスロおよびモスにおいて実施した聞き取り調査及び視察調査に基づくものである。庇護申請者の多くは、出身国での政治的迫害を受け、あるいはそのおそれがあるために国外脱

-
- (1) UNHCR. “Regional Strategic Overview 2019/2020”
<https://data2.unhcr.org/en/documents/download/67235>
(最終閲覧日：2019年3月1日)
 - (2) UNHCR ウェブサイト
<https://data2.unhcr.org/en/situations/syria>
(最終閲覧日：2019年3月1日)
 - (3) 難民の移動の過程を記録したキングスレー、パトリック『シリア難民——人類に突きつけられた21世紀最悪の難問』（藤原朝子訳）ダイヤモンド社、2016年のほか、BBC が制作した『BBC ヨーロッパ難民危機～越境者たちの長い旅路～パイリンガル版』2015年参照。

出した者である。本研究に協力してくれた人には、現段階で難民認定されていない人、あるいは庇護申請が却下された人も含まれるため、人物名はすべて仮名を使用することとする。また聞き取り調査についても、場所や時期をあえて記載しないこととした事例もある。

「難民」に内在する他者性

難民・強制移動研究を行う小泉康一は、難民が概して「受け身の犠牲者⁽⁴⁾」という単一の集団と見なされがちであることを問題視する。移動の複雑化に伴い、画一的な分類が難しくなってきたからである。また、小泉は、彼ら・彼女らは性別、年齢、富、ネットワークなどの内的要因によって、異なる選択肢を有しているのであって「非人間化された塊」として捉えることも問題であるとも指摘する。この議論が示す問題は、難民にしばしば押し付けられる「他者性」のイメージなのではないだろうか⁽⁵⁾。

ただし同時に、部外者がイメージする「難民」の枠組みに個々の事例を帰納的に当てはめていく方法では、他者性を拭い去るよりは、かえって塊としての他者性をクローズアップさせるおそれもある。すなわち、好奇の目に晒すことによって、かえって難民を「われわれ」とはかけ離れた「他者」として遠ざけてしまう問題が生じる。あるいは大量の難民の到来は、滅多に起きないからこそ、「自分たちは底辺に追いやられていると考える者（国民）にとって、（移民や難民といった）下には下がいるのだという事実の発見は、魂が救われるような、尊厳と自尊心を取り戻せる出来事⁽⁶⁾」となってしまうことすらある。

ジェンダーの視点からは、1985年に『ナショナル・ジオグラフィック』の表紙を飾った「アフガン・ガール」が、「かわいそうなアフガン難民」を代表させられたことも、「難民」に注目が集まり、かえって他者性が増幅したと無関係ではないだろう。「アフガン・ガール」は、美しく無力化された「他者」だったからこそ、支援が集まったのだが、自己と他者という二項対立の他者側に「難民」を押しやることで、結果的に眼差しの暴力が生まれる契機にもなった⁽⁷⁾。この議論を突き詰めれば、難民に着眼する研究は、結果的に眼差

筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師、東京大学特任准教授などを経て現職。

著書に『現代サウジアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、『イスラーム世界のジェンダー秩序』（明石出版、2014年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）、Higher Education Investment in the Arab States of the Gulf (Gerlach, 2016)、Arab Women's Activism and Socio-Political Transformation (Palgrave, 2018) など。共訳に『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

(4) 小泉康一『国際強制移動とグローバル・ガバナンス』御茶ノ水書房、2013年、p. 8

(5) 当該分野を研究する墓田桂も、近年の人の移動には、難民や庇護申請者のみならず、内政の混乱などをきっかけに生計手段を求めて移住する「難民と移民の中間者」も多く見受けられるようになってきたと指摘している（墓田桂「難民・強制移動研究の新たな課題」墓田桂ら編『難民・強制移動研究のフロンティア』現代人文社、2014年、p. 11）。

(6) 久保忠行「序論—収容、制度化と非収容の経験」『難民研究ジャーナル』No. 8、2018年、pp. 3-17.

しの暴力を生む諸刃の剣となる可能性を常に内包していることになる。そのような暴力性を避けながら遂行できる研究がいかなるものかは簡単に答えが見つかるものではない。だが、たとえば、「アフガン・ガール」のような特定の人物の容姿をクローズアップするのではなく、長期的な視点から難民の語りに着目することで、「美しい無力な女性を救済する」といったパターンリスティックなプロジェクトから距離を置くことができるだろう⁽⁸⁾。

ノルウェーへの道のり

筆者が訪問した難民受け入れセンターで聞き取り調査に応じてくれた庇護申請者の多くは、金銭的、体力的・心理的な問題、そして女性は貞操の危機に直面しながらノルウェーにたどり着いた。女性たちは、移動に伴う危険や恐怖感を思い出したのか、語りたがらなかった人も少なくなかった。

家族4人で移動してきたイラク人女性は、ブローカーに一人2,000米ドル以上の費用を支払ってゴムボートに乗ったという。親戚から資金をかき集めてようやくゴムボートに乗ったが、ギリシャに到達できずにトルコに逆戻りを余儀なくされた。再度の航行に、さらに同額程度の費用が必要になった。

体力的・心理的な限界に直面した女性もいる。60歳代のパレスチナ人女性は長年イラクに住んでいたが、イラク国内での宗派対立が激しくなり1996年、家族でシリアに移り住んだ。しかし、「アラブの春」でシリアの治安が悪化したため、またこの時までには夫は死去し、子どもたちは皆、スウェーデンやノルウェーで難民認定を受けて生活していたため、2012年にトルコに移動し、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に難民申請した。だが、3年間待っても難民認定されなかったため、2015年に大勢の人がヨーロッパへと移動する流れに乗って、トルコからギリシャなどを経てノルウェーに密入国した。彼女はトルコからギリシャに渡るゴムボートが転覆し、頭まで海水に浸かった経験が忘れられないという。小さなゴムボートに、定員を大幅に超過した人数が押し込まれるため、ボートが海に転覆し、海に投げ出されたそうだ。泳ぐ習慣のない彼女にとっては、命の危機すら感じる出来事だった。幸いボートに戻れたが、この恐怖感は一生涯忘れないだろうと言う。

移動中、性的嫌がらせを受けた女性もいた。シリア出身のラバは、治安状況が悪化し、

(7) 辻上奈美江「『アフガン・ガール』をめぐる眼差しの暴力：主体・表象・交差性（特集 ムスリム社会における名誉に基づく暴力）」『文化人類学』82巻3号、日本文化人類学会、2017年、pp. 386-394。

(8) 筆者はこれまでの研究で、ヨルダンに避難したシリア難民女性による『シリアの女王たち』において出演者が語った移動の経験に着目した研究を行った。出演者らは、自らの安全の危機と隣り合わせの状況であっても、声を上げることによって、「非人間化された塊」として捉えられ、好奇の目に晒されることに抗ってきたが明らかになった。辻上奈美江「シリア難民女性による演劇：癒しの実験とジェンダー規範」山内昌之編著『中東とISの地政学——イスラーム、アメリカ、ロシアから読む21世紀』朝日新聞出版、2017年、pp. 313-329。

レバノンにいた夫はシリアに帰国できず、当時7歳だった息子も学校に通うことができなくなったので、家族と話し合っって出国を決めた。女性1人で子どもを連れて出国することは危険と感じたため、義理の妹とともに移動した。義理の妹は6ヵ月の子どもを連れていた。トルコとの国境近くでは、移動を斡旋するブローカーがいた。ブローカーに、なぜ男性の同伴者がいないのか尋ねられた時には、やはり女性のみでの移動が危険であったと感じ、恐怖感が募った。国境を越えると手荷物検査をされた。携帯電話はどこかと尋ねられたので、実際には袖口に隠していたが、理解できないふりをすると、服の上からではあったが、胸や臀部を含む体全体を触られた。この話をすると、当時のことを思い出したのか、ラバはしばらく黙り込んでしまった。

成人男性不在で移動したラバには、さらなる問題が起きた。幼い子を連れて長時間歩いて疲れ果てた末に国境を越えると、ブローカーを通じてようやくバスに乗れることになった。大人は日本円で1人5,000円ほど、子どもは2,000円ほどだった。お金を支払って車に乗ろうとすると、ブローカーに「早く金を払え」と言われた。「すでにお金は支払った」と反論したが、乗車できるまでにしばらく口論しなければならなかった。乗車できたのは夜遅くなってからだった⁽⁹⁾。

単独で移動したイラク人女性は、一瞬油断した際に貴金属や現金の入った鞆ごと盗まれたという。この鞆には彼女がイラクから持ち出した財産のほぼ全てが入っていたので、すぐに警察に届けた。だが鞆は戻ってこなかった⁽¹⁰⁾。

難民受け入れセンターでの生活：社会的・政治的生を奪われた状態か

アジア福祉教育財団が2005年に行った調査によると、ノルウェーにおける難民受け入れ方法は、UNHCRの第三国定住プログラムに基づくクオータ制によるものと、個別の庇護申請者を審査するものとの二種類ある⁽¹¹⁾。本研究が着目しているのは、後者の「個別難民」と呼ばれる人びとである。同報告書によると、個別難民は、警察に登録後トランジットセンターに移送され、140ヵ所あるとされる難民受け入れセンターに入所するという。

先述の久保は難民の収容について、アガンペンらの議論を敷衍して、排除され、人権を奪われた例外状態にあると論じている⁽¹²⁾。アガンペンの例外状態とは、番号・記号化されて社会的・政治的な生を奪われ、生物学的な生しかもたないことを意味する。筆者が訪れた、オスロから90キロ離れたフルダールの難民受け入れセンターは、劣悪な環境をイメージし

(9) 筆者によるインタビュー。2017年8月10日、於フルダール。

(10) 筆者によるインタビュー。2017年8月12日、於オスロ。

(11) アジア福祉教育財団難民事業本部『ノルウェーにおける第三国定住プログラムによって受け入れられた難民及び庇護（難民認定）申請者等に対する支援状況調査報告』アジア福祉教育財団、2005年。
<http://www.rhq.gr.jp/japanese/hotnews/data/pdf/59.pdf>（最終閲覧日：2019年3月10日）

(12) 久保、2018。

がちないわゆる難民キャンプとは異なる。また人びとは完全に行動の自由を奪われているわけではない。とはいえ、市街地からの距離や金銭的制約という点では隔離・排除の意味を読み取ることもできる。また、国籍や社会的背景にかかわらず、庇護申請者に難民受け入れセンターが配置されることや、「市民」ではない庇護申請者が教育を受けられない問題もあった。また多くの人々が渡航に多額の資金を要したため、ノルウェー政府の金銭的支援はあるものの、金銭的な制約を受けており、結果的にセンター外での移動に制約があることもうかがえた。だが同時に、被収容者らの間では、社会的・政治的な生を取り戻そうとする営為も観察できた。

筆者が訪問した難民受け入れセンターは、郊外の自然豊かな場所に設置された、二階建ての山荘風の一軒家が20件程度ある集落だった。各家屋には、広いリビングとキッチン、シャワーとトイレ、そして複数の寝室が設けられている。ほとんどの家屋では、国籍もバックグラウンドも異なる複数の世帯がリビングなどを共有していた。単独の女性や女性のみのグループには、女性のみ家屋も用意されていた。台所には冷蔵庫、コンロや調理道具がある。また広いリビングにはソファが複数個あるほか、テレビやWi-Fi設備も整っている。暖かいお湯の出るシャワーもあり、滞在者はこれらが無償で利用できる。それに加えて、ノルウェー政府は毎月、センター滞在者に生活費を支給している。パレスチナ出身の女性の場合は、1,100ノルウェークローン（14,000円程度）が支払われていたという⁽¹³⁾。センターに滞在する庇護申請者の多くは、これを食費に当てていた。

センターは街から離れているため、買い物はセンターがバスを運行する日にまとめ買いをしておくことが多いという。公共の交通機関を乗り継いで、時にはオスロまで出かけていくこともあるようである。だが、ノルウェーまでの渡航費を借金している者や、自ら資金を工面したとしても渡航中に使い果たした者、あるいは盗難に遭った者もあり、総じて慎ましい生活を送っているように見えた。

センター滞在中は教育を受けられない問題もあるようだった。イラク出身の30歳代後半の女性は、21歳の妹と、19歳と17歳の2人の子どもの教育について心配していた。2017年に筆者が聞き取りをした際には、妹と子どもたちは2015年から2年間、教育を受けていなかった。

キャンプでの生活は、多くの滞在者にとって苦痛を伴うもののようなものである。多様な国籍や背景を有する人が、ひとつの集落にまとめられることに不快感を覚える人もいた。出身国で活躍していたことを自負している女性のなかには「誰も信用できない」と漏らす者もいた。実際に、出身国ではテレビに出演していたという垢抜けた容姿のカップルもいれば、

(13) 筆者によるインタビュー、2019年3月1日、於オスロ。なお、金額は状況によって異なるとの情報も得た。

きわめて素朴な身なりの人もいた。癌を患いノルウェーに庇護申請したがうまくいかず、一旦はイラクへの帰国を余儀なくされたが、再び庇護申請に挑戦している高齢の女性もいた。流暢な英語を話す者もいれば、母語以外の言語は何もわからない人もいた。先述の、2年間教育を受けていないというイラク出身の21歳の女性は、英語を話す機会がなく、単語などをかなり忘れてしまったという。詩を書いたり、絵を描いたり、庭で植物を育てて、努めて明るく過ごす女性もいた。積極的に人間関係を築こうとする人もいたが、できるだけ他人との接触を避ける人もいた。

ジェンダー規範の異なる人びととの共同生活においては、服装に留意するなどしてジェンダー規範の維持が目指されているようだった。複数の世帯が同居する家で過ごすシリア出身の女性は、一日中ヒジャブを着用して過ごしていた。彼女にとっては、家族の寝室のみがプライバシーが守れる場所であるが、料理やお茶を用意するには多国籍の人びとと共有する台所に行かなければならない。彼女のところには、センター内の来客も多かったため、家族の寝室は、しばしば応接間としても使用された。常にヒジャブを着用しておくことで、ジェンダー規範を乱さずに、自らの移動や、人びととの交流が可能になっているようだった。

センターに滞在する人の国籍は実にさまざまであったが、実際にひとつのセンターに、どの国の出身者が何人滞在しているのかはよくわからなかった。というのも、書類上は難民受け入れセンターに滞在していることになっているが、実際には、すでに移民や難民認定者としてノルウェーに居住している親戚宅に身を寄せている人も一定数存在しているからである。特に女性が単独で、または女性のみで移動してきた場合には、このようなケースが多く見られるようである。彼女らには、最低でもセンターに宿泊しなければならない日数が定められている。彼女らは、この日数を満たすために毎月、数日間をセンターで過ごしている。筆者が訪れたセンターには、イラク、シリア、パレスチナ出身者のほかに、エリトリア、アフガニスタン出身者が滞在していた。2016年の訪問時には、一定数のシリア人がいるようだったが、2017年の訪問時には、シリア人の多くは居住許可を得てすでにセンターを去ったか、そうでなければ各自治体による受け入れのオファーが来るのを待っている状況であると説明された⁽¹⁴⁾。2017年の調査時には、居住許可を得られなかったアフ

(14) なお、ノルウェー移民局 (UDI) によれば、2018年に難民申請をしたシリア人は419人 (男性209人、女性210人) であり、トルコ (765人) に次ぐ人数であった。その他に難民申請をした人の出身国は、エリトリア (241人)、イラン (119人)、イラク (104人)、アフガニスタン (91人) であった。Norwegian Directorate of Immigration. “Asylum Applications Lodged in Norway by Citizenship, Sex and Age (2018)”

<https://www.udi.no/en/statistics-and-analysis/statistics/asylum-applications-lodged-in-norway-by-citizenship-sex-and-age-2018/>

(最終閲覧日：2019年3月1日)

ガニスタン出身の女性からも意見を聴取できたが、彼女はシリア人が重点的に居住許可を獲得し、まるでアフガニスタンは平和で安全な国のように扱われることに憤りを覚えていた⁽¹⁵⁾。

このように、個別難民としてノルウェーに密入国した庇護申請者らは、難民受け入れセンターにおいて、たしかに市民からは隔離され、排除された生活を強いられている。また、国籍や社会的背景を考慮せずに、難民受け入れセンターに配置する方法は、個々の難民を番号・記号とみなしていることのあらわれかもしれない。しかし、彼ら・彼女らが生物学的な生しかもたない存在であると結論づけることはできないようにも思われる。むしろ、彼ら・彼女らは、居住認定を受けられるかどうか、受けられなかった場合により良い庇護申請先はどこか、居住認定を受けられた場合にどこに居住希望を申請するか、などについて日々、センター内で情報交換を行っている。筆者が訪問したセンターでは、アラブ人同士の会話では、密入先としてどの国が最も待遇が良いか、物価が高い／安いのはどこか、働き口が見つかりそうなのはどこかといった話題があふれていた。このような話題は、家計や家族に責任を有する男性たちの間で、常に情報交換されていた。シリア出身の20歳代前半のある独身男性は、ドイツに来るよう同じく庇護申請中の友人から誘われたが、ノルウェーのほうが所得水準が高いと知り、ノルウェーを目指したという。シリアに婚約者がいるという彼は、ノルウェーに来て彼女との結婚を迷い始めたそうである。英語もノルウェー語もできない彼女がノルウェーで生活することになれば、彼が全面的に彼女の生活を支援しなければならない。将来、彼が居住許可を得てセンターを出ることになれば、より良いチャンスが訪れる可能性もあると彼は言う。彼は、ノルウェー人女性と結婚することで、彼のノルウェーでの社会的ステータスも上昇するのではないかと考え始めたと言った⁽¹⁶⁾。

またセンター内での人間関係の噂は、暇を持て余すことの多い滞在者の話題の的となっていた。たとえばあるシリア人女性が親友のモロッコ人女性の夫と親しくなり云々といった噂話は、挨拶がわりに交換されていた。

まとめにかえて

本稿では、主に2015年にシリアやイラクからトルコ、ギリシャなどを経てノルウェーに密入国し、庇護申請した主に女性の移動の経験と難民受け入れセンターでの生活の一片を明らかにした。彼女らへの聞き取り調査からは、かつて『ナショナル・ジオグラフィック』で注目されたような、部外者が想像するような、無力な、救済を必要とするだけの存在で

(15) 筆者によるインタビュー、2017年8月10日、於フルダール。

(16) 筆者によるインタビュー、2016年8月8日、於オスロ。

はないことを示しているように思われる。難民受け入れセンターでの彼女らの生活は、確かに市民からは隔離され、排除されている。だが他方で、社会的・政治的な生を取り戻すための営為も観察できた。彼女らは、居住許可を得られるか否かの判断を待ちながら、情報交換を通じてその後の戦略を立てていることが明らかになった。

謝辞：本研究は、科研費（17H05117）の助成を受けて行った研究の成果である。

*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。